

どうなるキューバ★ラテンアメリカ

パネリスト 敬称略／写真右から

小倉英敬 神奈川大教授・国際関係論ラテンアメリカ思想史専攻

八木啓代 音楽家・作家

伊藤千尋 ジャーナリスト・元朝日新聞記者

要約文責・井ノ上節子



小倉英敬

ラテンアメリカの現状とキューバ

減少傾向のラテンアメリカ中道左派政権

ここ3年間のラテンアメリカを見てみたい。状況の変化は、13年3月のベネズエラ・チャベス大統領の死後からである。マドゥーロが大統領になったが、昨年12月の総選挙で、野党連合に大敗した。野党は、罷免の是非を問う国民投票を与党に迫った。今年6月、大統領は来年3月ごろの実施を表明している。

米国ケリー国務長官は、支持表明を行い、米国とベネズエラの高級レベル会談実施を発表し、両国の緊張が緩和されるだろうと発言している。来年3月実施の国民投票では、与党側は敗れるだろう。

アルゼンチンでは、中道左派の後継者が敗れ、現マリク大統領になった。5月にブラジルでは、ルセフ大統領が停職となった。今年11月、ニカラグアで大統領選挙があり、現オルテガ大統領が出馬を表明しているが、再選可能かは分からない。17年5月には、エクアドル大統領選挙があるが、今の大統領は出馬できず、同じ路線をとる人が出なければ途絶える。ボリビアでは、モラレスが4選出馬できず、状況は悪くなってきている。

ラテンアメリカの中道左派政権は、33カ国中16カ国あった。そのうち10カ国は残るだろうが、主要な中道左派政権が変わってしまう可能性がある。このような情勢をどう見るかが、大きなポイントとなる。偶然の情勢変化の重なりでなく、背後に何らかの動きがあると見る事ができる。

かつてのようにCIAが表舞台に出ることは、1980年以降はないが、代替機関がある。ナショナル・エンドウメント・オブ・デモクラシー（NED）で、資金の95%以上が米国から出ている。1989年のニカラグア大統領選挙に介入し、90年ハイチ、アリストテッド大統領の敵対候補を支援した。ベネズエラでは未遂に終わったが、ク

ーデーター計画に関与していた。ラテンアメリカで、直接的ではないが、何らかの形で野党側を資金援助し、それ以上の介入を行っているというのが、私の見方である。

今後、ラテンアメリカでは、南米諸国連合やカリブ共同体などの求心力が失われていくことになる。ベネズエラとキューバが作ったALBA（米州ポリバール主義同盟）においても、ほとんどの国が抜けてしまうことになりかねない。急進派の多いカリコム（カリブ共同体）でも変化が生じていくことを、私は懸念している

米国との国交正常化で他の国々との経済関係強化へ

私は、90年1月から94年9月まで、ハバナの日本大使館に一等書記官として勤務していた。92年11月、米大統領選でパパブッシュがクリントンに敗れた。キューバのアメリカ利益代表部の参事官の話では、ブッシュが2期目に入れば、必ず国交正常化するという事だった。しかし、クリントン政権下ではやれず、息子のブッシュは、支持基盤がネオ保守主義や反共キリスト教原理主義だからできなかった。今回2014年12月にラウル、オバマ双方から国交回復の話が出たが、これは90年代に起こってもおかしくなかった。

国交正常化の背景として、オバマ大統領個人の外交業績を上げておきたい。ヒラリー・クリントンへの借りを返すという意向があった。キューバ側の事情としては、中道左派政権の情勢変化と、最大の問題は、膨大な貿易赤字を抱え込んでいるということである。輸出が輸入の40%しかない。普通こんな国は、機能しない。機能出来ているのは、サービス収入で補填しているからである。

一つは観光収入、もう一つは人材派遣である。ベネズエラへ医師、看護師を派遣し、極めて低価格で石油を提供してもらっている。来年、罷免を問う国民投票に敗れたら、ベネズエラからの支援を断たれてしまう怖れがある。チャベス死後、キューバはベネズエラからの支援に見切りをつけるよう追いこまれていたのではないかと懸念している。



ローマ法王フランシスコの仲介で、国交正常化が始まると、キューバ側が応じ、今後は米国との正常化によって得られる他の国々との経済関係を強化する中で、ベネズエラとの関係が途絶えることで陥るかもしれない経済危機への対応を真剣に考えており、日本との経済関係の強化を求めるのは、その辺の事情からだろう。

ラテンアメリカの新自由主義は可逆的なもの

ラテンアメリカでは、90年のチャベス政権の後、アルゼンチン、ブラジル、ニカラグア、ボリビアその他の中道左派の拡大、長期化があった。世界的動向として、2008年リーマンショック以後、管理型経済モデルへの移行がみられる。これは、新自由主義経済に反するものだが、管理型資本主義の段階へ入ったと言われている。

しかし、最近のラテンアメリカ、インド、中国など新興諸国の動向は、必ずしも、そうではない。揺り戻しがあり、ジグザグではあるが、現状では、新自由主義が主流である。私の見方では、新自由主義は、地球環境問題や、食糧問題など、人類の問題に対処できない。個人的には、協同組合的社會主義が望ましいが、簡単にできるわけではない。当面は、資本主義の枠内で、管理型がいいのではないと思う。

今、中道左派への逆風、不利な状況があるが、再び戻るのか、保守化が続くのか。私は、ラテンアメリカの新自由主義は、可逆的なものとみている。その根拠は二つあり、まず6、70年代と比べ、政治環境が変わってきている。民主的選挙で、変革勢力が政権に到達できるようになった。これは、不可逆である。

もう一つは、新自由主義では格差が拡大する。いずれは、革命勢力が力を強め、新たな主体形成のあと、再び戻るだろうが、10年~20年かかるだろう。秋の米大統領選挙で、クリントンが勝った場合、夫が立ち上げた米州自由貿易地域（FTAA）を、再びとりあげるだろう。TPP難航の一方で、FTAA交渉は、2005年ブラジルなどの反対で挫折していたが、再現の可能性はある。

八木啓代

キューバと米国 国交回復の舞台裏

アメリカのキューバ潰しに抗ったヨーロッパ各国

キューバの激変は、過去に3回あった。1959年のキューバ革命、1989年のベルリンの壁崩壊によるソ連・

東欧圏の消滅、そしてキューバと米国の国交回復。80年代のキューバは、私はその頃行き始めたが、生活は豊かだった。ソ連から莫大な援助を受けていたから。ソ連からすると、アメリカに一番近い所に社会主義国としてキューバを置いておくのは意味があった。80年代のハバナは、バスが24時間運行していたし、物質的にそんなに豊かではないが、貧しいという感じはなかった。

ところが、ベルリンの壁崩壊が起こって、ソ連・東欧圏が消滅し援助が一切無くなった。このころ南米は、ほとんど軍事政権かそれに近い状態だったので、キューバは孤立無援になってしまった。その頃の報道の論調は、北朝鮮とキューバは世界で最後に残った共産主義国家ということで扱われていて、忘れもしない、ニュースステーションで久米宏さんが、フィデル・カストロの肖像が映ったのを前に、「馬鹿は死ななきや治らないとはこのこと」と言ったが、当時ほとんどの人がそう思っていた。それ位キューバは、孤立していた。

世界中が、キューバは潰れるだろうと見ている中で、アメリカは、キューバ民主化法案（トリセリ法）で経済制裁を強め、一気にキューバ潰しにかかった。ところが、反撃に出たものたちがいた。ヨーロッパだった。

ソ連・東欧圏が無くなって、キューバが潰されてしまうと、アメリカが一人勝ちしてしまうことに対し、ヨーロッパの人たちは、不愉快に感じたのではないか。突然、スペインとフランスが、キューバに対し援助を始めた。93年、米ドル合法化、個人レストラン合法化と同時に、スペインとフランスのホテルチェーンが、キューバに進出してきた。合併のレストランやホテルがどんどんできた。ブランドも進出してくる。ヨーロッパをターゲットにする観光開発が行われるようになる。

それまでのソ連・東欧型のサービスの悪い中、友好団体や近くの人たちが行く形から、一般の人や、ヨーロッパの客を相手とする、本格的なサービスを目指したホテル研修が始まっていった。私も、当時よく日本人から見たらどうか、ホテルに泊ってみた感想を聞かせてと言われたことがある。

94年、フランス、イタリア、スペインの客が、どっとキューバになだれ込んできたが、フランスが中心となってヨーロッパにおけるキューバ観光ブームが起こっていた。夏場のヨーロッパでは、音楽フェスティバルが盛んだが、アフリカブームが一段落後、キューバブームになったが、これは、キューバを潰してはいけないという意味合いを持ってブームを起し、沢山の観光客をプロモーションして、キューバに送り込んでいた。

一方、アメリカは、それを知らない訳はない。指をくわえて見ている状況になってしまった。音楽をやっている立場からいうと、実は音楽は政治と密接で、革命後、



世界を席卷したマンボやチャチャチャは閉め出されてしまった。つまり、アメリカがすべてのレコード会社を握っているの、革命後は世界の音楽市場から閉め出されて、キューバ音楽は日本に入ってきた。ところが、91年に、ゴンサロ・ルバルカーバというキューバのジャズピアニストが、

世界契約に成功した。東芝EMIができたのは、当時の日本の経済が凄かったから。80年代キューバで公演したベネズエラのサルサ歌手は、アメリカから閉め出された。

アメリカ人のキューバ観を変えたブエナビスタ

94年、プエルトリコの有名な歌手アンディ・モンタニェスが、キューバで非公式で公演を行った。95年、アメリカの有名なジャズプレイヤー、ハービー・ハンコックも非公式にコンサートをした。非公式というのは、形の上でキューバの有名人のコンサートにして、ロコミで、ハンコックが出ると伝える。あそこにハービーがいる、お客さん、もしかしたらハービー・ハンコック？ と促されたハンコックが嫌々ながら舞台に立つというもの。

こうして、94年、95年と続くと、アメリカのミュージシャンの間では、キューバでコンサートをやるのが勲章のようになっていった。97年には、RMMがサルサ歌手イサーク・デルガードと正式契約をするが、アメリカ大手では初めてだった。こうなると、アメリカ中の会社が堰を切ったように、キューバのミュージシャンと契約する。そういう流れの中で出てきたのが、ブエナビスタ・ソーシャルクラブだった。

コンパイ・セグンドは、何年も前からフランスで有名になっていた。アメリカ人にも受ける感動的ストーリーを作り上げて、キューバが受け入れられる素地をつくっていった。虐殺や拷問などが行われているとんでもない恐ろしいところという、それまでのアメリカ人の対キューバ観は薄れていった。この頃、非合法のキューバへの入国が行われていった。

2003年、国会議員や人権団体15万6千人、非合法の訪問者2万2千人。非合法とは、旅行代理店が間にはいって、メキシコやジャマイカ経由で入国するもの。これでジャマイカ航空が、経営の息を吹き返したほどである。ロコミでキューバ行きが広まっていった。

アメリカ財界が国交回復をプッシュ

2001年のハリケーンの際、人道支援として食糧輸出が再開され、以後継続している。3年前あたりから、キューバは、アメリカにとって第4位の食糧輸出国である。アメリカ南部の農業地域から見るとお得な輸出先。アメ

リカ観光業界にとっても、非常に魅力的な投資先なのに、美味しいところをヨーロッパに持っていかれている、という焦りがある。そういう中で、アメリカ財界から、キューバとの国交回復をやるというプッシュが行われていた。反キューバのキューバアメリカ財団というのもあったが、キューバを出た2世、3世の人にとっても、キューバとのビジネスチャンスを逃したくないという風に、考え方が変わってきた。そういう状況の中で、オバマ大統領の国交回復の選挙公約が掲げられた。

キューバ側もマリエル特区、個人営業の緩和、新外国投資法を作っていた。エボラ出血熱の流行に対して、キューバが医師、看護師を派遣すると、ニューヨークタイムズはキューバを讃え、国交回復をすべきだというキャンペーンを張った。このように世論的に、国交回復のための布石は敷かれていて、私的には気持ち遅かったという感じである。

ニューヨーク・ハバナ定期便が就航されるや、予約で一杯になった。キューバは、決して孤立していなかった。国交回復は、寝耳に水と言われるが、私にとってはそうではないし、キューバは激変しますか？ という質問には、いやキューバは激変しないでしょうと答えている。

伊藤千尋

したたかなキューバ 反撃する中南米の保守派

キューバ ←→ 米国の飛行機が1日110便！

キューバには、71年、20歳の学生のと看、半年さとうきび刈りで行き、その後朝日新聞記者、特派員などで10数回行った。今年1月～2月にも行った。(これから、映像交えての話)ハバナ中央公園には、アメ車のクラシックカーが並んでいる。経済封鎖以前のものだが、お蔵入りしていたものを修理して使っているのでピカピカだ。こうした車が急激に増えている。

1月の『Granma』には、海外からの観光客が記録的で、これまで1年で300万人だったのが、去年は350万人と出ていた。アメリカからの観光客は8割増しで、国交回復効果である。これからキューバは変わるが、変わる前のキューバを見たいという訳である。キューバの観光産業は、確立して受け入れ態勢はできている。

観光馬車があり、ロンドンにある2階建観光バスのような、今まで無かったものもある。どこのレストランにも音楽バンドがいて、自前のCDを売り、産業化している。こういうことが、今までとは違う。今年2月に、米・キューバ間航空協定により飛行機が飛ぶようになった。1日110便も。カナダとの間では130万人が来るが、



1日15便だ。キューバには10カ所の空港があるが、110便は、凄い数。キューバはホテルが少ないので、2011年に、党大会でそれまで無かった自営業も経済活性化の大事な一角と認め、許可をすることになり、民宿が開始されている。

今回行ったとき、土産店が増えていることに驚いた。アメリカで印刷されたゲバラのカレンダーが売られていた。もう一つ、空港を出て気付いたのが、太っているキューバ人が多いこと。今までで一番。儲かってきたからだ。地方都市の公園などで、携帯やスマホが見られた。今、国内の携帯・スマホは300万台で、PCも使われており、大きく変わってきた。

カストロは米国からの人道支援食糧を現金で購入

どうして国交回復をしたかについて話したい。2002年、ハバナ港に入るアメリカの貨物船の写真がある。2001年11月、ハリケーン被害にあったキューバへ、ブッシュ大統領が人道援助として食糧を送ろうとした。9・11のテロ以降、アメリカにとっての敵は中東にあり、ラテンアメリカを味方にしたい、固めたいということだった。フィデル・カストロは、経済封鎖している国から援助は受けないが、現金で買うと対応した。以来、貿易が始まり、毎年続いている。2002年、キューバに行ったが、ホテル・ナショナルで130社のアメリカ企業が参加して、農産物紹介の物産展が開かれていた。どうしてこんなことがかというと、前年、農産物が売れ、キューバ以上に、アメリカが喜んだ。空白の市場が目の前に現われたわけである。

モンタナ州は、牛肉・小麦の産地だが、近くだから輸送費がかからない。イリノイ州は、大豆・とうもろこしの産地。農産物業者は、ロビー活動し、政治家に経済封鎖解除を働きかけるようになっていった。前提として国交回復をと。

この頃、イリノイ州出身上院議員の名前はオバマ。彼は大統領になったが、支持者からの突き上げがある。イデオロギーは関係ない、儲かるか儲からないかだ。去年のアメリカからキューバへの農産物額は440億円に上る。これに法的体裁を整える必要があるということである。

これを、もう一步後押ししたのは、マイアミのキューバ人たち。亡命キューバ人が120万人いる。ピッグス湾事件の司令官は、キューバで掴まったが、釈放され、帰ってから弁護士になった。10年前に会ってインタビューした。毎年キューバに行っていると言っていた。キュー

バから亡命したアメリカ大リーガーは、オフシーズンにキューバへ帰り、子どもたちに野球を教えている。

キューバ側としては、物があるアメリカに行ってみよう。アメリカ側は、一歩入れれば即認める、亡命システムができています。受け入れ機関があり、いろいろやってもらえる。働いてドルを稼げる。亡命者が稼いだドルを送金し、あるいは持って帰り、キューバは潤沢になってきている。観光だけではない。

有機農業がなぜ盛んかと言えば、危機をチャンスに変えたということだ。ソ連の援助が一挙に無くなった時、キューバは潰れるかと思いきや、自前で作るしかない、化学肥料を使わない有機農業をやりはじめた。この国は、相手がアメリカだろうがソ連だろうが、言い分を手玉にとるしたたかな国である。この辺が凄いところだ。

無料の医療と教育は維持するが、食は自分で

サンタクララのゲバラの像。左腕に包帯を巻いているのは、垣根を飛び越えようとして躓いて骨折したからである。包帯を巻いてあげたのは、革命軍の司令官でゲバラ直属の部下だった。この人に、今回会って話を聞いた。

アフリカで一緒に従軍して、帰国後にはハバナ市長を10年間した。ゲバラは、一直線のイメージがあるが、冷めた面もあったという。相手の良いものは採用している。

中央銀行総裁になったが、医学生だった彼が、なぜそれが出来たかという、経済専門家を集めて、好きにやれ、責任は俺がとるからと言い、専門家に教えてもらい、勉強して3カ月経つと、もう教えることがないと言われた。

彼はアメリカのマネジメントシステムがいいから、取り入れようとしていた。良いものは、アメリカであろうが何であろうか、取り入れるという柔軟な発想があった。

配給所は、今はほとんど無くなり、細々とやっている。キューバは、絶対平等の共産主義は放棄した。法の下での平等は堅持しつつ、具体的には、医療の無料、教育の無料は維持する。その他、食べることに限っては、自分でやってくれ、国はそこまで面倒はみないとしている。

キューバの輸出入のアンバランスの問題は、アメリカの政策が大きい。キューバが他の国と貿易するのにちよっかいを出す。トヨタがキューバから、ニッケルを輸入して部品に使っていた。すると、アメリカにトヨタの車が輸出できなくなる。そうやって、日本がキューバと貿易できないようにしてきた。キューバが輸出したくてもできない状況がある。

去年、ベネズエラに行った。1973年のチリのクーデター直前の状況によく似ていた。店から物が消えている。政情不安を起こし、今の政権はひどいと。物がなく、資本家側が隠している。これは73年のチリと同じ。結果、与党は敗北した。



Q 国交回復後、キューバは今後どうなるか。

A (小倉) 八木さん、伊藤さんの見解についてひと言。メキシコやベネズエラで起こったことの背後は、必ず存在する。我々の知らないところで、動きがあり、2006年以前からあること。ルセフがもつかどうかについては、また、次期大統領選に出ようとしているルーラ潰しでもあるが、今後も継続されるだろうから、私は、楽観視していない。

90年代のキューバの経済改革は、中国やベトナムに比べ、幅が狭いという感じ。株式の売買自由化を、個人まで進めれば、株式市場に国内外の資金も導入され、資金が得られるようになって、変わる。キューバ側が考えてはどうか。

A (八木) 国交回復後、キューバは大丈夫かという話があったりするが、急激な変化はないと思う。90年代からの地道な交流活動やロビー活動あつての国交回復だから。スペシャル・ピリオド(特別期)と言われる90年代、キューバに対しアメリカは、厳しい締めつけをした。ソ連、東欧のような若者のムーブメントもあった。世界から取り残されて、これじゃまずいという若者グループがいた。しかし、ソ連、東欧との決定的違いとして、おじいちゃん、おばあちゃんから、59年の革命前がどんなだったかを聞いている。

悪い形で資本主義化すれば、アメリカに美味しいところだけ持っていかれると、改革派の若者でさえ分かっていた。キューバの国民には、アメリカの資本主義への警戒心がある。資本主義を全面的にすればハッピーとは、思っていない。キューバは、したたかに発展していくと思う。

A (伊藤) ハバナ大学の先生が、観光案内に変わっている。その娘は、アメリカに留学しているというが、亡

命システムを利用し、フロリダの大学に行っている。ピザハットでアルバイトして、母親に送金している。これが普通のキューバ人。

キューバは、アメリカまみれになるか。実は、ずっと前からアメリカまみれで、アメリカ人が好きなのだ。アメリカ人は、ロシア人より分かりやすいという。アメリカ文化は昔からあつたし、今は、インターネットで入る。いろいろ利用するについては、キューバは、歴史を耐えてきて、したたかだ。

3世代を見てみる。革命を起こした世代と、革命の中で育った世代は、昔の中南米の悪い気質を引きずっている。政権とつたら、美味しい部分を取りたいと。

生まれた時から革命後の文化の中で育った世代は、新しい人間になろうという教育を受けている。一人はみんなのために、みんなは一人のためにという。考え方が違う。それが、政権の中枢にいる。カストロ兄弟がいなくなったら、革命第3世代が政権を握り、キューバは良くなるだろう。

一つの問題。ベネズエラで見ると、中南米は、カリスマ性がものをいう。そういう人がなくなるとグシヤグシヤになる。カストロの後が心配だが、ゲバラがものをいうかも。キューバの今後については、悲観していないし、そんなに変わるとも思わない。キューバ人のジャーナリストの言だが、「マクドナルドが入るには、しばらく時間がかかる」。

アメリカとの間では、気象と医療で、情報交換が進んでいる。クリントンが勝ったら、オバマより前から回復推進派だったから、事態は進むだろう。共和党が議会の握っているの、経済制裁解除は遅れるだろう。

Q カストロの革命はナショナリズムの革命で、社会主義・共産主義の革命ではない。アメリカは、戦略的に間違った。オバマを歓迎したが、キューバはしたたかだ。人づくりに金をかけたり、教育に金をかけたりすれば最終的に勝つと思う。



A (小倉) キューバは、社会主義を目指していたと思うが、本当に求めていたのは、正義と平等で、社会主義はその手段。単なるナショナリズムではない。本質的な部分を譲っていないという意見に賛成するし、最終的に人づくりが勝つというのは、まったく同じ意見だ。

キューバは今後も、ラテンアメリカの変革の精神的軸となり続けるだろう。キューバ人は、日本人以上にサムライで、武士は食わねど高楊枝ぐらいの精神だ。

Q 2年前、キューバに行ったとき、日系2世と話をした。一番の悩みは、指導層がうまく世代交代していない、革命精神が原点に戻っていないと話していたが、どうか。それと、革命博物館にバチスタ時代の展示が少ないのはなぜか。もっとあったほうが、教育にはいい。

A (伊藤) 世代交代が進んでいないのは、おっしゃる通り。革命を起こした世代は、幹部として残った。しかし、40、50代が、閣僚の中心となって実質的に動かしている。そういう意味では、世代交代は進んでいる。

博物館に関しては、キューバにとって、革命は今の話で、アメリカとの戦いはどうするということで展示が多い。

A (八木) 革命博物館は、70年代につくっている。想像だが、あの頃の人たちは、バチスタ時代は、よく分かっていたことで、展示する必要がなかったということではないか。

40、50代の人には、外交官だったりすると、合法的にアメリカのハーバード大学、スタンフォード大学などに留学して、キューバの対アメリカ政策研究所にいたりする。日本にも、京都大学に留学したり、遺伝子研究所に來たりした。

ソ連崩壊時、アメリカがキューバに攻めてくるからと、友だちは、戦争になるから帰れと言ったり、枕の下に銃やマチェテ（山刀）を置いたりして寝ていた。サイレンの鳴り方で、どういう非常警備態勢をとるか、といった

緊張感のなかでここまで来た。革命は、過去のものではない。

Q ベネズエラやブラジルの動きの背後にあるアメリカの力、メキシコ、ブラジル、アルゼンチンの巨大メディア攻撃に対して、ラテンアメリカ諸国は、どう対峙していくか、展望を。

かつてのチリやアルゼンチンのような露骨な介入は無いと思うが、アメリカの巨大メディアと新自由主義にどう対峙していくか。私は、地域としてまとまって対峙していくのではないかと、その時、キューバのしたたかさ、手腕はカギだと思うが。

A (小倉) おっしゃる通り。ここ1、2ヵ月を見ても、ベネズエラのマドロー大統領のキューバ訪問、キューバ外務大臣のベネズエラ訪問など協調の動きがある。コロンビアの民族解放軍との停戦交渉に、ベネズエラが仲介役となっているが、カストロ兄弟の助言があるのではないかと。キューバが中心となり、インテリジェンシア、あるいは情報収集できる組織を作ることによって対抗できるのではないかと。

Q キューバに行ったのは2回。1回目、どうして医療と教育を無料にできるのか聞いた。植民地経済のひどさを経験している国民は、教育と医療は、基本的人権の中心だという教育を受けてきているから、金がかかってもやるのだという。

2回目、革命時代の兵士がダンナの日本女性に聞いた言葉。奪い合えば足りないが、分かち合えば足りると。キューバ革命の本質だ。革命委員会から叩き上げている人たちがいるから、後継者には困らないという。

日系移民はどういう現状か、町内会のような革命委員会は怎么样了、民主主義の母体になっているか。

A (八木) 日系移民は、ピノス島（青年の島）に沢山いらっしゃる。ハバナにも。

革命前、フィデルが、ピノス島監獄に幽閉されていたとき、原田さんが同情し、食べ物や服を差し入れた。それをフィデルは感謝し、親日的ベースが作られたという。

革命防衛委員会（CDR）は、隣人監視組織ではない。

いろいろなことを決めて、いろいろな相談にのってくれる。80年代、一人旅をしていて、泊まる場所を探していると、村の人がCDRに連れて行ってくれ、宿探しをしてくれたりした。

A（伊藤） 革命直後、カストロとゲバラが、農場に原田さんを訪ねて行った。接収しに。しかし、米やスイカの質の良さ、大きさにビックリしてしまう。味の良さに感動していたという。日本人が丹念に育てていることを聞いて、ゲバラは、農場を接収せず、作り方をみんなに教えてくれという。キューバ農業の基を作ったのが日系人。有機農業も、70年から日系移民が始めた。

Q 経済制裁はどうなっているか。また、女性の活躍の様子は？

A（小倉） 国交回復は、行政レベルで、制裁は議会レベルの問題。アメリカ議会で共和党が大半の今、経済制裁撤廃法案は不可能だ。

A（八木） キューバの女性は恵まれている。兵役もあるが、ボランティアで代替したり、職種で免除されたりすることはある。職場では、完全に男女平等。託児所は義務付け。女性が強くなり、離婚が増えた。5～6回の離婚歴はザラだ。ホームパーティに行くと、子どもの親がいろいろ。

最近、社会問題化しているのは、女性が結婚したくない、子どもは欲しいが男はいらないということ。子どもが生まれて、男を捨てる。男が、その子は僕の子と言っても、DNA検査は女性の承諾がいる。これで、泣いている男の子がいる。でも、男女差別はあるかと聞くと、ある、と答えが返る。私たちのとは、レベルが違うが。

A（伊藤） 2002年に、ベネズエラでクーデター未遂事件があった。これは、アメリカと中南米の関係を変え

た事件だ。アメリカが筋書きを書いたクーデターが成功したかに見えた時、一端諦めかけたチャベスが、カストロに電話した。カストロは、絶対諦めるな、大統領として通せと。チャベスは、大統領職を放棄しないと言い続けた。間もなく民衆が蜂起し、クーデターは未遂に終わった。そのとき、中南米の大統領が集まった国際会議で「正当な政権はチャベス」と首脳たちが宣言した。こうして、中南米は自信を持った。

2011年にできたCELAC（ラテンアメリカ・カリブ諸国共同体）は、中南米が結束してアメリカを排除、大きな流れがここで、また強くなった。

Q キューバから何を学べるか。

A（小倉） 地域統合は、時代の流れ。キューバが初めて加盟したCELACでのキューバの役割は大きい。今の日本の政権は、キューバ精神とはまるで別。

A（八木） 感心するのは、特別期でも、大災害でも餓死者を出していないこと。分配し、教育、医療、介護が無料であることで、人間が、どれだけ精神的に安定して暮らせるか。それこそ、キューバ人が支えてきたこと。キューバに批判的な人でもキューバを一定評価する。今の日本は真逆。出来ることをするしかない。

A（伊藤） オバマが広島に行ったが、ゲバラも行ったことがある。平和記念館を見て、アメリカにこんなことをされて、まだ、何も言わないのかと、ゲバラが怒ったという。今、同じ状況がある。

参考になるものを、一言で言えば、「自立」。キューバは自立している。いじめられ、辛酸なめても、生き抜いてきた自立する姿勢を見て、日本が恥ずかしくなる。キューバは、何もなくても、国民が凜としている。日本が学べるのは、コレだと思う。

